2026_0107「陽だまりのハト」日々の理科 4168 号

お茶の水女子大学　サイエンス＆エデュケーション研究所　田中　千尋

・

台東区上野公園で、12 月 31 日の昼頃に撮影した一羽のドバトです。大晦日とはいえ、この日は比較的暖かく、冬の弱い日差しが公園の地面に落ち、イチョウの落ち葉が黄金色のじゅうたんのように広がっていました。写真の個体は、20 羽前後の群れから少し距離を置き、落ち葉の上をゆっくりと歩いています。

ドバトは、もともと岩場に生息していたカワラバトが、人に飼育され、やがて野生化した存在です。都市のビルや橋を崖に見立て、公園や広場を採食の場として利用する姿は、現代の都市環境に高度に適応した野鳥の典型と言えます。

首の側面に見える緑から紫への金属光沢は、色素によるものではなく、羽毛表面の微細な構造が光を干渉させて生じる「構造色」です。陽だまりの中で首をわずかに動かすたびに色調が変わり、冬枯れの景色の中に一瞬の鮮やかさを添えています。

年の瀬の静かな昼下がり、群れから離れて過ごすこの一羽の姿は、人の往来が絶えない上野公園にあっても、都市と野生が緩やかに共存していることを感じさせてくれます。

（2025 年 12 月下旬／台東区上野公園）